じん肺史の一断面

――ウィルヒョウ説を中心に――

梶田　昭

一八五六年にベルリンで一つの委員会が組織され、上部シレジアに派遣された。その地の坑夫に多発していた肺疾患の実態を調べるのがその目的であった。委員会は、この肺疾患が、内因性の肺メラノーシスに他ならない、という驚くべき結論を答申した。

炭鉱業の先進国であった英国の事情を見よう。一八世紀の産業革命は石炭の露天掘りから地下採掘への転換と深く関連していた。炭鉱夫の黒唾病（black spittle）の歴史をここでは詳しく論じないが、一九世紀の初頭には、医師たちは、肺、気管支リンパ節の黒色色素が吸入塵によることを明らかに知っていた（たとえばピアソン、一八一三）。吸入炭粉が肺疾患（マーシャルの phthisis melanotica、あるいはストラットンの anthracosis）をひきおこすことも三〇年代にはほぼ常識になっていた。それを思うと、ドイツ人のこの結論はひどく時代錯誤のものであった。

ちなみに、肺のメラノーシスという言葉は、ラエンネック、ベイルら、一九世紀始めのフランス人に由来する。ラエンネックは炭鉱夫の la matière noir pulmonaire の外因性起源を知っていた。

ドイツの委員会はウィルヒョウの見解に影響された、といわれる。まだ若年のウィルヒョウがそれほどまでの力を持っていた、ということも不思議だが、しかもそのウィルヒョウは、八年前には同じ上部シレジアの疫病の調査をして、ひどくラディカルな「社会改革」の処方を書いたはずなのである。

肺の炭症について、ウィルヒョウの最初の発言は、その疫病調査に先立つ一年前、一八四七年のことである。そのアルヒーフの第一巻によせた「病的色素について」と題する論文で、ウィルヒョウは肺の着色の原因を、体内でヘマチン体から由来する「色素」のひとつに求めたのである。

一八五八年三月八日、ウィルヒョウはベルリンの英国医学協会で「坑夫肺の病理」と題する講演を行った。この時期、ウィルヒョウは「細胞病理学」の連続講義の最中で、前日の三月七日には第七講「血液」、二日後の三月十日には第八講「血液とリンパ」を講じている。この講演でもかれは、スコットランドから送られた肺標本の所見に関連して、肺色素のヘマチン体由来に固執している。なおここで検査の対象になったのは、ケリカーによってスコットランドからもたらされたもの、グッドサーが二回にわたって送付したもの、ハンガリーの医師から届けられたもの、から成っていた。

ウィルヒョウが、肺に、滲出物由来の色素沈着症と別に、固有の炭症もおこることを認めたのは、トラウベの報告（一八六〇、一八六六）以後のことである。トラウベは、吸入粉塵の肺胞内滞留、間質への侵入を始めて証明した。その第二報の剖検はコーンハイムによるものである。

ツェンカーが Pneumokoniosis（じん肺）の語を提案したのは一八六七年であった。ようやく「じん肺」の概念がドイツ人の間に定着したのである。一八六九年、マイネルは Chalicosis（石肺症）という言葉を導入したが、あまり普及はしなかった。

これは病因性微生物が活発な話題になるより少し前のことである。外来性の吸引物の役割をウィルヒョウがなかなか承認せず、それが、職業病（じん肺）の認識においてドイツが後進の地位に甘んずるひとつの原因となったのである。

（東京女子医科大学名誉教授）